

第6回奈良 ESD 連続セミナー

大西 浩明

◇日時：2025 年 9 月 16 日（火）19 時～21 時

◇方法：Zoom によるオンライン形式

◇参加者 48 名

◇内容：単元構想案の相互検討③

【ルーム 1】 ファシリテーター：長谷川かおり（奈良教育大学）

1)伊藤華子先生(滋賀県草津市玉川こども園) 5歳児「カレーパーティーをしよう！」

- ・園庭や畑で様々な野菜を育て、世話をしたり収穫を楽しみにしたりする姿があり、その野菜を使ってカレーパーティーをする
- ・カレーパーティーにむけて話し合う機会をつくり、主体的に活動できるようにする。地域のスーパーに買い物に行ったり、消防署の方においしいカレーの作り方を聞きに行ったりして、地域とのつながりを感じながら活動が進められるようにする。
- ・異年齢の友達を招待するための話し合いや準備も行うことで、クラスみんなで協力する、最後までやり遂げる、自分たちでできたという達成感を味わう経験できるようにする。
- ・カレー作りは先生方に手伝ってもらうので、地域の方も含めみんなに支えてもらったことを実感し、感謝の気持ちを感じられるようにする。

話し合いから

- ・カレー作りは今年度で4年目であり、貴重な体験として根付いており、ESDの視点で計画することで、実践をブラッシュアップしてきている。園内で活動を完結せず、家庭や地域とつながることを意識している。例えば家庭でカレーの作り方を聞いて、それをもとに作り方について相談したり、買い物の時にお店の人との関りに加えて、産地を意識させたりなど、工夫次第で活動の幅が広がり、経験が深まると思っている。
- ・カレー作りの話し合いで、意見が分かれた場面はあったのか？
 - キノコを入れるか入れないかについて話し合った。みんなが満足できるような方法を考え出した。
 - 「コミュニケーションを行う力」に「カレーの作り方について相談する」という内容も加えてはどうか。
- ・環境についての視点が足りなかったように思う。
 - 野菜の皮などをコンポストに活用することができたのではないか。食べ残しの扱いについての視点も環境にかかわるかもしれない。

2)川村桃佳先生(滋賀県草津市立老上こども園) 3歳児「おがくず粘土で遊ぼう！」

- ・1学期から、様々な感触遊びを行っている。砂を使った遊びでは、全身を使って感触を楽しんだり、見たて遊びを楽しんだり、身近な自然物を加えて遊んだりしている。粘土遊びでは米粉粘土、もち粉粘土、油粘土を使って遊ぶ中で、それぞれの粘土の特徴を存分に感じている。
- ・アレルギーの子どもも使える、自然に返すことができる、米粉粘土やもち粉粘土のように時間経過に伴って水分が飛ぶようなことがなく、継続して形作りができる、などを鑑みておがくず粘土を教材として使えるよう研究中である。
- ・粘土遊びをする中で、保育者が様々な思いや表現を尊重したり認めたりすることで一人一人が大切

にされていることを感じてほしい。また再利用やリサイクルについて知ったり、ものを大切にしようとする態度や無駄にしない気持ちをはぐくんだりしたい。

話し合いから

- ・おがくずの大きさや量はどの程度か
→粉となって舞うほどの細かさが必要。それとのりを混ぜて成型できる程度の硬さにするのでおがくずは大量に必要。
- ・子どもたちが作ったものを見ることで「多様性」に気づいたり、それぞれの作品が大事にされることを通して、「公平性」を感じたりできるようにするために「形作れること」を重要視されているということが分かった。
→3歳児の発達を踏まえると、まずは感触を楽しむ経験が十分にできることを大切にしてほしい。
- ・おがくず粘土で遊ぶ前におがくずに触れる経験ができるとよいのではないか
- ・おがくずを地域やご家庭に協力していただいて集めることができれば、園外とつながりを持てる活動になるのではないか。
- ・子どもにとって必要と思う教材を先生自身が楽しみながら開発しているところが素晴らしい。

【ルーム2】 ファシリテーター：阪本さゆり（奈良保育学院）

1)坂田初美先生(滋賀県草津市立玉川こども園) 5歳児「立命館大学の留学生と交流しよう」

学区内に立命館大学があり、4歳児のときも留学生を招待して交流会を行った
外国からの転入児や外国籍の園児もいる
留学生と関わる中で、いろんな国のことを「知りたい」「話をしたい」と感じさせたい
万博に行った子も多く、国旗を描いたりする子もいて外国への興味関心は高い
母国紹介、互いに自己紹介、いっしょにゲーム 5か国ぐらい来てもらえたら

話し合いから

- ・ただ教えてもらうのではなく、子どもたちからの発信（自分たちのことを知ってほしい）も大事にしたい。
- ・子どもらが今夢中になっている遊びや活動をいっしょにできればいい。何か一緒につくってもいい。
- ・ジャンケンだって国によって違う、そこから文化の多様性を感じられると思う。
- ・いろんな国との違いから、「じゃあ日本は・・・？」と考えてくれたらいいのではないか。

2)高松美香先生(滋賀県草津市立玉川こども園)

5歳児 「からだのはなし ～自分の体も友だちの体もだいじ～」

保健指導は、「自分の体を守る」という健康教育でもあり、人権教育でもある
導入で絵本「うみとりくのからだのはなし」を利用

「プライベートパーツは、見るのも触るのも自分だけ」

「自分の体にだれがどんなふうに触れるかは、自分で決められる」

みんな一緒ではない私だけの自分 自分の気持ちと友だちも気持ち → プライベートパーツ

話し合いから

- ・「からだのはなし」だけではなく、「からだと心のはなし」だと思う。
- ・「人を大切にするためには、まず自分を大切にすること」を幼いころから感じさせたい。
- ・園のトイレの中が廊下から見えるのは、誰がトイレに入っているかを教師がつかむためではあるが、

- それは当たり前ではないというクリティカルシンキングが教師にも必要だと気づかされた。
- ・子どもたちの行動変容に期待したい。

3) 清水智佳子先生(奈良教育大学附属こども園)

4・5歳児(長時間・預かり保育「なかよしタイム」)「みんなで育てたお花を新しいこども園に植えよう」

工事中の園舎の花壇に花がない → 新しくなる園舎を飾る花をみんなで育てよう

腐葉土をふるいにかける中で、ミミズや虫の幼虫、においや手触りに興味をもつ

「みんなが笑顔(幸せ)になる」という視点を持ち、人の喜びを自分の喜びと感じられる子どもに「役に立つ喜び」を感じさせたい

成長記録を iPad で撮影し、掲示するなどして生長を楽しみにできるように

話し合いから

- ・子どもは小さいながらも「人の役に立ちたい」と思っている。きっと豊かな体験になると思う。
- ・幼保連携型のため、来年度からは0歳児も入ってくる。
- ・異年齢でこういう活動ができると、積み上げになってこのあとの活動につながる。
- ・工事の人に対して、「暑い中、ありがとうやな」という言葉が出てきたのはうれしいこと。

【ルーム3】 ファシリテーター：中澤哲也(大和郡山市立片桐西小学校)

1) 野口詩歩先生(愛媛県新居浜市立北中学校)

中学校第1学年 外国語科「Happy New Year! ~年末年始の過ごし方~」

- 日本に住んでいるものの、日本のことをあまり知らないので、「日本の年末年始」についてタブレットで調べる。
- 転校生(インドネシア)に、日本の文化を伝える。
- 調べることを通して、「価値観の違い」に気付かせたい。
- 自国の文化を学ぶことで他国の文化を尊重する。
- 文法重視だったのを内容重視に転換した。全10時間くらいの設定。
- インドネシアからの転校生の困りごとは日本語がわからないこと。
- 教えたい文法をいかせてないのでは? → 国際理解という分野を担えるようにしたい。
- 万博をネタにして世界各国の文化に触れさせたい。
- 単元構想図の中に現在進行形をどこで使っているか明記する。
- 「違い」だけでなく、「同じ」ところを見つけてもおもしろいのではないかな。
- 日本、アメリカ、インドネシア言語感覚の違いを見るのもいいのでは。
- 最後にその国の人になり切って、現在進行形で発表させる。その中で文化の違いに気付かせる。
- 決められた学習内容を学ばせつつ、ESDの価値観にも気付かせることの難しさを感じた。

2) 吉田剛先生(茨城県つくば市立竹園東小学校)

小学校第3学年 総合的な学習の時間「竹園のまちのたからもの~地域のまつりを調べよう~」

- まつりつくばは今年で40年という歴史の浅いまつり。
- 一般的な「神様を祭る」という目的ではない。
- ひろげるは地域の「竹園フェスタ」が何のために行われているのか再度考えなおしたい。
- 単元構想の作成時点で子どもに身近な教材を準備しているのがすごい。

- 地域の愛着を持っている児童はいるのだろうか？が授業づくりの出発というのがすばらしい。
- 吉田先生ならではの山場は？ →子どもが主体的に学べることを大切にしている。
- 祭りつくばの起源が、「人とつながりたい」という思いが生んだもの。これからの新しい祭りの見本になる。
- 新しい祭りを作り上げた素晴らしさを受け継いだ子どもたちが、新しい地域で自分たちも！という気持ちになればいい。
- 「地域をつなげる」ために行われている祭りを知った児童が、「学校のみんなをつなげる」ための「ひろげる」活動になればいい。

【ルーム4】 ファシリテーター：圓山裕史（奈良市立伏見小学校）

1) 藤田恵美先生（愛媛県新居浜市立垣生小学校）

小学校第3学年 総合的な学習の時間「地域に伝わる史跡や自然を調べ、地域の魅力を調べよう」

- ・恒例となっている学習をESDで自分ごと化できるようにしたいと考えた。「シビックプライド」（地域に対しての愛着だけでなく、自分たちがつくっているという思いが大切だ）が身に付くこと、またはその素地となるように学習を展開することを考えている。
- ・流れとしては、宝泉寺や垣生山史跡めぐりなどをもうすでに行っていて、「昔のものがどうして残っているのか」をグループごとに調べたり、地域の人や公民館の館長などにインタビューしたりして、発表するという流れ。発表は校内のESD発表会で行う予定もある。

話し合いから

- ・発信として、公民館に掲示などで地域に向けてすることも可能ではないか。
- ・「～について学ぶ」ままで留まっているように感じてしまう。それでは、「自分ごと化」「シビックプライド」といった到達点にたどり着かないのではないか。「～を通して学ぶ」ことでどんなことを学ぶのかを明確に持ち、それに向けた発問も考えてみた方がいいのでは。例えば、垣生山清掃をしている地域の方の話を聞くだけでは、「すごいな」で終わってしまうが、実際に垣生山清掃を自分たちでも試みることで、気付いたことから啓発のための発信や課題に向けての行動化・発表につながっていくと、ねらいとする到達点までたどり着くのではないのでしょうか。
- ・そう考えるとタイトルも「調べよう」から「伝えよう」にした方がいいですね。
- ・3年生という学齢を考えると、いろんな史跡に意識が散らばるより、例えば垣生山に焦点をあててもいいかもしれないですね。
- 学校の総合の流れで、3年生では地域の史跡などに触れておきたい。
- だとすると、いろんな所を調べた共通点などから課題を見つけて、行動化といった流れでもいいですね。

2) 富樫智子先生（山形県立鶴岡中央高等学校）

高校2年 総合的な探究の時間「自分の生き方・働き方の探求」

- ・まず、仕事（働き）が社会とどうつながっているのかを考える。これは、仕事と社会のつながりを考えたり、調べたりしていく。
- ・次に、自分の目指す仕事はどうかを考える。ここでは、具体的に自分の目指す仕事はどう社会につながっていくのかを考えたり、庄内地域に暮らす社会人をゲストティーチャーとして、調べ学習だけではわからない生の声を聞いたりして、さらに生き方・働き方を具体的に知ることになる。例え

- ば、「仕事をしながら好きなことに打ち込むのか？」とか「大学で学ぶことへの具体例」などである。
- ・そして、自分がどのように働いて、社会に貢献していきたいかを考える。

話し合いから

- ・ゲストティーチャーは何人くらい？1人に対して大人数ではねらいにたどり着くような話になっていくのか？また、学生が興味のある人の話を聞くことができるのか？
- 20人くらいで毎年同じ人に頼んでいる。本当は1人に対してもっと少ない学生の組み合わせにしたいが、予算問題がある。
- 卒業生や保護者を利用して予算のかからない人数を確保していくといいかもしれない。
- オープンキャンパスを活用するのもいいかもしれない。全員に同じ機会を与えられるわけではないが、自分たちよりも1つ社会人に近いステージで学ぶ先輩から話を聞くことでも、自分の目指す仕事に具体的に近づくのではないかな。
- ・発問について、「自分の目指す仕事」について具体的に持っていない生徒もいるだろうし、好きなこと・興味のあることがどんな仕事につながるかを考えるといいかもしれない。
- ・私自身、仕事をしながらサッカーのコーチをしているし、コーヒー好きでバリスタから教師になった人もセミナーの仲間にはいるし、そういった人材を利用するなり、探すなりするのもいいですね。

3)井上岳海先生(奈良女子高等学校)

高校 総合的な探究の時間 「万博の学びを通じた奈良らしい共生社会」

- ・1学期に万博についてテーマや伝えたいこと、社会の動きなどを学び、一部の生徒ではあるが、未来の地球学校のイベントで国際交流の体験も行っている。そして、万博の建設に関わっている奈良発祥の企業である大和ハウスの示した未来は自然との共生であることを学んだ。
- ・そこから自分たちの住む奈良に目を向け、シカとの共生に注目する。そこで感じる奈良の素晴らしさを観光客や中学生に向けて発信するということで、今までのように SNS を利用して発信していくのもいいが、今回は「SDGs 学び旅」とコラボを行う。
- ・さらに、次の万博も「共生」や「カーボンネイティブ」がテーマとされるようなので、この学びがつながっていくといいなとも考えている。

話し合いから

- ・発信の形をもう少し詳しく教えてほしい。
- 「SDGs 学び旅」を企画している。(株) 学びの旅に、自分たちで考えた企画を提案して考えを具体的な形にしたり、一緒に活動することで観光客や中学生の反応を直接感じたりしながら発信できる形を考えている。

【ルーム5】 ファシリテーター：河野晋也（奈良教育大学）

1) 浅野稜太先生(千葉県立柏陵高等学校)

高校3年 英語科「各地の災害と繋げる、地元“千葉県”の災害について」

English Communication III(6時間) + LHR(2時間)

英語の教科書では、厳島神社とヴェネツィアの共通点として、美しい水の景観があり、一方で水害の危険があることを紹介されている。これを活かして防災の学習を構想した。子どもたちは、自分の住んでいる地域の災害リスクや備えておかなければならないことなどについては、ある程度の知識を持って

いる。一方で、実際に備えている生徒は一部に限られたり、十分な備えができていなかったりすることもある。自分の住んでいる地域での災害リスクについて学び、他者への発信まで促したい。外国語の授業として計画するのであれば、外国語を使ったり、異文化理解につなげたりするなどしていくと外国語の授業として実践する意義になるのではないか。

2) 濱岡桜さん(NPO 法人 NELIS) 高校2年 総合的な探求の時間「パレスチナ問題」

日本の子どもにとってなじみがうすいパレスチナとイスラエルの問題について、何が起きているのかを調べ、自分たちに何ができるのかを考えさせる学習。単元構想図では、調べて分かる問いだけでなく、考えなければならない問い、複数の解が生まれる問いなどを設定すると学びが深まるのではないかという意見があった。わかりやすく理解させる工夫として、ゲーム形式でできることを考えるのは一つの方法として考えられるとの意見もあった。海外の紛争について「できること」を考えさせることは難しく、「人に伝える」ということに落ち着くことが多い。場の設定をどのようにするべきか検討することが必要であるとの意見が出た。

【ルーム6】 ファシリテーター：中澤静男（奈良教育大学）

1) 奥村健介先生(比叡山中学校)

中学校第3学年 保健「衛生的な飲料水の供給にわたしたち自身に関わる大切さ」

単元展開の概要

自分たちの行動と飲料水の供給の関係に気づかせたい

安心安全な飲料水が供給されていることを当たり前と思っている

途上国の飲料水は危険であるという認識

発問1 水道水がそのまま飲める国はどれくらいあるのだろう？

10 カ国程度／195 カ国 なぜ、こんなに少ないのだろう？

水質に問題がある インフラが整備されていない お金や時間がかかるから

発問2 日本ではなぜ水道水を飲むことができるのだろう

- ・水質がいいから 森林環境が国土の77%もある
- ・インフラが整備されているから
- ・浄水場の方々が努力されているから

発問3 普段の生活で、どのような場面で水を使っているのだろう。またその時の意識は節水が大切だという認識はある

発問4 節水するとどのような影響があるのだろう

水を作るのにもエネルギーが必要（浄水場） エネルギーの節約になる・温暖化を緩和

話し合いから

- ・1時間では少なすぎる。総合などにつなげて、机上の学習に終わらせない工夫が必要。
- ・単元の学習を通して、期待する生徒の姿への変容をどうやってとらえるか？
単元前後に感想文を書かせて、生徒本人に変容を自覚させるとよいのでは。
- ・自分が使う水の量を把握・意識化させるために、「ペットボトル何本分」という提示の仕方がいい。
「京（みやこ）エコロジーセンター」に展示があるので、教材研究に訪れるように。
- ・E S Dの価値観との関連で、クリティカルシンキングや生態系自然環境の保全も加えては。

2) 金谷双葉さん(教職大学院 M2) 中学校第3学年 音楽科「世界をつなぐ音ー平和を伝える「鐘」ー」
学校生活全体で合唱を根付かせたい。1つのテーマで1年間かけて合唱をつなぎつないでいきたい
「鐘」の持つ役割ー大きな音ー遠くの人にも届くように

- ・平和について、平和の大切さを考えてほしいという願い
- ・仏教における梵鐘 仏様の教えから自分を振り返らせたい

単元展開の概要

4月 《HEIWA の鐘》/中里幸広 の合唱

なぜ、HEIWA の鐘というタイトルがつけられたのだろうか？ 東大寺の鐘の見学

8月 広島の時鐘 「広島平和記念式典の時鐘」の映像を視聴する

鐘に込められた願いは「永遠の平和」 だから、子どもが代表で鳴らしている

○世界にも「鐘」のタイトルがついた曲がある。 《鐘》/ラフマニノフ を聴いてみよう。

不気味、怖いといった印象

○どのような思いでラフマニノフは《鐘》を作曲したのだろうか ロシア人の「鐘」に対する思い。

○浅田真央のオリンピックの映像を視聴する (BGMがラフマニノフの「鐘」)

浅田真央が演技で伝えたかったことは？

○平和ってどんなことなんだろう？

○多くの人に平和の大切さを知ってもらうためにできることを考えよう

「HEIWA も鐘」の合唱をつくって聴いてもらおう。

話し合いから

- ・ラフマニノフを聴く前後の感想を比較して、自分の変容を実感させるといい
- ・「HEIWA も鐘」の歌詞に着目させ、生徒が「平和」について考え、対話する場面が必要
暴言・暴力・いじめがない 尊重すること CARE ステレオタイプにならないこと
- ・戦争状態にある今、ロシアの音楽を教材化する意味を教員は持つておく
指導者と国民は別。国民は平和を望んでいる。 国民の音楽としてのラフマニノフ
- ・浅田真央を先に見せ、演技に込められた意味を考える過程でラフマニノフの曲解に取り組んではどうか

3) 藏前拓也先生(王寺町立王寺北義務教育学校) 小学校第4学年 総合的な学習の時間

「だるまさんがころんだ！ーだるま発祥の地(達磨寺)わたしたちのまち王寺町ー」

単元展開の概要

「だるまさんがころんだ」をやってみよう

だるまさんがころんだについて知っていることの交流

発問1「なぜ『だるまさんがころんだ』は昔から親しまれてきたのだろうか。」

「どうして王寺町は、だるま発祥の地と言われているのだろうか。」

聖徳太子と達磨太子 校区に残る伝説や逸話を知りたい

○校区にある達磨寺にひみつがあるかも。行ってみよう。

王寺観光ボランティアの方からお話を聞く。

○王寺町文化財課の井上さん&岡島さんにも聞いてみよう

○だるまマーケットにも行ってみよう

発問2「だるまさんがころんだ」の魅力は何だろう？

- ・異年齢の人たちが楽しめる・なかまづくり。健康づくりにもなる。

発問3「達磨寺」「だるまさんがころんだ」の魅力を伝えるために、自分たちにできることを考える

★だるまプロジェクト発進！

話し合いから

- ・達磨寺があることは知っている。「雪丸像」のあるお寺。知っているけど、よく知らない。教材化することで、校区についてもっと知りたくなる。地域愛が育つ。
- ・達磨寺が1400年間も受け継がれている理由を考える。インタビューする。今後も受け継がれていくために大切なことを考え、行動化する。
- ・だるまさんがころんだ選手権はぜひやってほしい。

【ルーム7】 ファシリテーター：中村友弥（奈良市立朱雀小学校）

1) 笠松誠司先生(和歌山県白浜町立日置中学校)

中学校第1学年 家庭科「日常食の調理と地域の食文化 ―紀州うめ豚の生姜焼き―」

中学1年生の家庭科調理実習において、地元の「紀州うめ豚」を使った生姜焼きを題材とする。本実践は、単なる調理技術の習得に留まらない。梅の産地である地域性を活かし、飼料に梅酢エキ스가使われている「紀州うめ豚」を通じて、地域の農業（梅農家と養豚家）の連携やつながりを学習する。

話し合いから

- 地域のブランド豚を調理し、実際に味わう体験そのものに価値がある。
- 家庭科での探求的な活動は、そのまま生徒の「生きる力」に直結するのではないか。
- 生徒の関心を高めるため、導入の工夫や「紀州うめ豚」の魅力（梅の循環性など）をより効果的に伝える方法が重要。
- 調理実習の運営面では、生徒だけでの実施の難しさから、外部支援者と連携し、より深い学びに繋げる工夫が求められるとの意見が出た。

2) 加藤佳緒里先生(愛媛県新居浜市立浮島小学校)

小学校第5学年 総合的な学習の時間「地元食材の魅力発見プロジェクト」

小学5年生を対象に「地元食材の魅力発見プロジェクト」と題し、地域の特産品である里芋に焦点を当てる。多くの児童が身近な里芋畑の存在に気づいていない現状から、実際に農家を訪問して話を聞き、地域の伝統行事「いもだき」を自ら作り、販売するまでの一連の活動を行う。

話し合いから

- 地産地消の推進が、地域とのつながりを生み、町おこしにも繋がる可能性が指摘された。
- 農業の後継者不足や耕作放棄地の問題といった、地域が抱える課題にも目を向ける必要がある。
- 教育実践上の課題として、ゲストティーチャーへの謝礼等、学校の予算不足の問題が挙げられた。
- 児童の学びをより深めるために、「里芋のキャラクター作り」のような楽しみながら学ぶ工夫や、ポスターセッション等の地域へ発信する活動を取り入れることで、郷土愛の育成や主体的な行動化に繋がるとの提案があった。

2) 藤原萌さん(音楽教育専修3回生)

小学校第6学年 音楽科「郷土に伝わる民謡『八木節』を知ろう」

小学6年生の音楽の授業で、発表者の地元である足利市に伝わる民謡『八木節』を取り上げる

樽や笛を使った演奏の楽しさだけでなく、夏祭りの開催困難や後継者不足といった『八木節』が直面する課題にも触れ、伝統文化の継承が地域の絆を強める意義を学ぶ

話し合いから

- o 学習の着地点として、学習発表会での披露や中学校の体育祭で踊るなどの発展的な活用案が提案された。
- o 魅力的な衣装や傘、踊りの背景にある由来や歴史に着目させることで、生徒の関心をさらに引き出せるのではないか。
- o 授業者が自身の地元の文化を扱うからこそ生まれる「熱量」が、教育活動において大きな価値を持つことが確認された。